

〈論 文〉

日本語と中国語の視覚表現：認知視点から見る対照分析

邬 海厅¹ (東京外国語大学大学院博士後期課程)

A Contrastive Analysis of Visual Expressions in Japanese and Chinese
From a Cognitive Perspective

Wu, Haiting (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード：視覚表現、認知の類型、身体性、主観性

Key words: visual expression, cognitive typology, embodiment, subjectivity

要旨: 本稿の目的は日本語と中国語の視覚表現をめぐって、語彙及び認知のレベルにおける両者の異同点を明らかにすることである。考察の結論から言えば、全体の傾向として日本語では観察者の非明示が採用されやすいが、中国語では観察者の明示化に傾いている。また、視覚動詞のゼロ化においては、日本語は中国語をはるかに上回っている。

Abstract: This paper explores visual expressions in Japanese, comparing with the corresponding expressions in Chinese. It is shown that there are similarities and differences between the two languages at the level of both vocabulary and cognition. Based on the data from *The Old Man and the Sea* parallel Corpus, the implicit perceiver is more commonly used in Japanese while the explicit perceiver is more common in the case of Chinese. It is also found that the perception verb tends to be implicit in Japanese.

原稿受理日 (2017-10-02)

査読後掲載決定日 (2017-11-07)

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp35-52. ISSN 2433-8923



¹ 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

本稿の目的は、認知言語学における「主観性」(Subjectivity)という観点から、日本語の視覚表現が、英語・中国語に比較して、どのような性質をもつのかを実証的に観察し、その要因を主に中国語との対比の上で論考することにある。

池上(2012)は、日本語は<主客合一>的な表現、即ち事態の観察者が観察対象に集中していて、自身の意識に注意が向けられないような表現が、英語に比べて卓越していると述べている。池上(2012:14)では、その具体例として、松尾芭蕉『奥の細道』の「平泉」の一節とその英語訳を、以下にあげる(1)のように例示し、日本語原文(1a)における「観察者のゼロ化」(観察者の省略)、「視覚動詞のゼロ化」(視覚動詞「見る、見える」の省略)に対して、(1b)(1c)(1d)の英語訳では、観察者“*We/I*”と視覚動詞“*see/saw*”が用いられていることを示している。

- (1) a. まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。(『奥の細道』平泉)
 b. We first climbed up to Palace-on-the-Heights, from where we could see the Kitagami, a big river that flows down from Nambu. (D.Keene 訳)
 c. First, we climbed up to Takadachi and saw the Kitagami was a large river flowing from Nambu. (H.Sato 訳)
 d. As I climbed one of the hills called Takadachi, I saw the River Kitakami running through the plains of Nambu. (N.Uasa 訳)

池上(2012)によれば、(1a)の芭蕉の日本語原文にみられる「観察者のゼロ化」、「視覚動詞のゼロ化」は、「主観性」の程度を測る基準であり、事態の観察者が観察対象に集中していて、観察者自身の意識に注意が向けられない「主観性の高い表現」すなわち<主客合一>的な表現であるという。

では、中国語の場合は、主観性という観点からみると、日本語と比較してどのような言語表現になるのだろうか。李(2016:7)では、以下の(2)のような日中対訳コーパスからの用例を挙げ、中国語においては、*see*に相当する視覚動詞<看见>(見かける/見える)を省略することはできない、と述べている。

- (2) a. 1919年4月5日，当时在日本留学的周恩来来到岚山，看见粉红色的樱花和绿色的松树在雨雾中若隐若现，不久，阳光从云间照射下来。
 b. 日本に留学した周氏は1919年4月5日に嵐山を訪れた。ピンクの桜と、緑の末は霧雨の中にけぶっていた。しかし、しばらくすると、雲間から太陽が差し始めた。(日中対訳コーパス：《日中飞鸿》(原文中国語)及び『日中飛鴻』(日本語翻訳))
 c. 1919年4月5日、当時日本に留学していた周恩来は嵐山を訪れ、ピンクの桜の花と、緑色の松の木が霧雨のなかを見え隠れしているのを見た。しばらくすると、太陽が雲

間から照り始めた。(筆者による直訳)

(2a)の翻訳として、日中対訳コーパスにおける日本語訳は、(2b)で、視覚動詞「看见」(見かける/見える)の主語である周恩来が見た光景そのものだけを描写し、「ピンクの桜と、緑の松は霧雨の中にけぶっていた。」と訳され、視覚動詞「看见」(見かける/見える)は訳されておらず、池上(2012)で示されているような、「観察者のゼロ化」、「視覚動詞のゼロ化」が起こっている。この場合、事態の観察者が自分自身を忘れて完全に観察対象に集中している「主観性の高い表現」となっている。

一方で、(2a)の中国語原文の日本語への直訳(筆者による)は、第一文「～周恩来は、嵐山を訪れ、～という光景を見た。」と、第二文「しばらくすると、太陽が谷間から照り始めた」では、主語が「周恩来」から「太陽」に変わり、視点が転換し、接続詞もないため、日本語としては、不自然な翻訳となる。

中国語においては、「観察者のゼロ化」、「視覚動詞のゼロ化」が起こる場合もあるが、日本語ほど、(2b)にみられるような、事態の観察者や視覚動詞が省略されるような「主観性の高い表現」すなわち、＜主客合一＞的な表現は構文的にも許されない。

そこで、英語の *see* を用いた構文が、日本語や中国語ではどのように表現されるのかを実証的に分析するために、筆者は、ヘミングウェイ著『老人と海』(*The Old Man and the Sea*, 1952, by Ernest Hemingway) の英語原文を用いて、三種類の日本語翻訳、三種類の中国語翻訳を対照させた英日中三言語のパラレルコーパスを作成した。以下、2節からは、このパラレルコーパスを用いて、英語・中国語からみた日本語の＜主客合一＞的表現を、英語・中国語との比較に基づき、検証していく。

2. パラレルコーパスに基づく視覚表現の対照研究

本節では、『老人と海』の日中翻訳本²を用いて、原文の英語との三言語のパラレルコーパスを作成し、英語の視覚動詞である *see* が日本語・中国語でどのように表現されているかを考察していく。特に、日本語の自他動詞の使用傾向や、日中両語の「観察者」及び「視覚動詞」の非明示化という、二点に焦点を当てて考察する。調査方法は「第三言語基準法」³を採用して対照を行う。『老人と海』の原文では、原形の“*see*”、過去形の“*saw*”と過去分詞形の“*seen*”を合わせて合計 128 例が使用されている。本稿では、それらの例文をすべて分析対象とする。

² 英語版：Ernest Hemingway 訳林出版社(2011)

日本語版：1 福田恒存 新潮社(1966)

2 中山善行 柏艚舎(2013)

3 小川高義 光文社(2014)

中国語版：1 海観 人民日報出版社(2000) 2 吳芳 上海訳文出版社(2006) 3 張愛玲 北京十月文芸出版社(2012)

³ 英語の原文を規準として、中国語と日本語の訳本を考察する方法である。一般的に、二言語を対照する場合、「直接比較法」という方法がよく使われるが、規準になる言語から対照される言語への翻訳上の干渉が免れない。これに対して、「第三言語規準法」を用いる場合、英語から中国語、日本語への影響もあり得るものの、少なくとも、同じ条件の下で二つの言語の対照が行われる。さらに、英語から翻訳対象への干渉を低減するために、複数の訳本を採用することにする。

2.1 語彙レベルの対照

動詞 *see* は、複数の意味を内包しているが、基本的には「光・色などの外界の対象物やその動きを眼で知覚する、見える」という意味をもち、その中核的意味から種々の意味を発展させ、概ね「物理的領域」、「心理的領域」と「言語行為領域」に分類することができる。以下、『英語基本動詞辞典』から、例文(3)-(8)を引用して、*see* の三種類の意味を説明しよう。

第一に、物理的領域の場合は、*see* の最も基本的な意味で、目で直接知覚することを表す。

(3) When one drinks too much, sometimes one sees double. (あまり酒を飲みすぎると、時々物が2重に見えることがあるものだ。)

(4) Can you see the ship on the horizon? (水平線のあの船が見えますか?)

次に、*see* の第二の意味として、例文(5)~(7)が示すように、*see* が心理的領域を表す場合は視覚対象の刺激により、受動的に心理的感知をしたり、自身の経験や知識に基づき、視覚内容や対象に対して判断を下したりすることを示す。

(5) I think I'll be able to help, but I'll have to see. (お力添えできると思うのですが、もうすこし事情が分かるまで待ってください。)

(6) I see many years of trouble ahead. (この先何年も困難が続くことが予測できる。)

(7) I can see a great future for you in music. (音楽の方面できっとあなたには輝かしい未来が待っている)

第三に、*see* が言語行為領域を表す場合(例文(8))、意味の漂白化が行われ、*see* の本来の実質的意味を失い、因果関係を示すようになる。

(8) Seeing that he's here, let's begin eating. (彼が来たから食べ始めよう。)

だが、深田・仲本(2008:139)によれば、*see* の三種類の意味領域は完全に切り離すことがむずかしく、「*see* が<見る>という視覚的意味を表すとされる場合にも、この視覚刺激の<解釈>という心理的な側面が含まれる。文脈によってこの視覚的意味とそれに基づく理解の意味のどちらが顕在化するかが決定される」と述べている。

次に、『老人と海』の日本語翻訳版と中国語翻訳版の両方の翻訳において、*see* と対応する表現について分類し、日本語翻訳と中国語翻訳の特徴を考察する。

まず、日本語への翻訳版では、対応する表現を「他動詞」、「自動詞」、「慣用表現及びコロケーション」「無対応」の四類に分け、それぞれについて分析すると、以下の表1のようになる。

表1 日本語翻訳版各翻訳における see の対応表現

訳本	他動詞	合計 (1)	自動詞	合計 (2)	慣用表現およびコロケーションなど	合計 (3)	無対応	合計
福田	見る(26)、認める(11)、見て取る(4)、確かめる(3)、眺める(3)、探す(2)、拝む(2)、見届ける(2)、知る、見逃す、見守る、眺め渡す、見せる、待ち望む、受け取る、見慣れる、見つける、探す、覗き見る、眺め渡す	65	見える(36)、わかる(4)、出会う(2)	42	気が付く(3)、お目にかかる(2)、目が利く(2)、目に入る(2)、見張りをする	10	11	128
中山	見る(19)、目撃する(16)、確かめる(6)、見届ける(5)、見て取る(5)、望める(4)、見分ける(3)、見せる(3)、見つける(3)、見つめる(2)、見上げる、確認する、見続ける、視認する、拝む	71	見える(12)、見当たる(3)、思い当たる、会う、見惚れる、見入る	19	お目にかかる(5)、目に映る(5)、目に留まる(4)、目のあたりにする(4)、目が利く(3)、探りを入れる(2)、姿を消す、目でとらえる、目をとめる	26	12	128
小川	見る(30)、見せる(3)、見つける、眺める、見渡す、拝む、見て取る	38	見える(48)、わかる(2)、会う	51	目が利く(2)、～してみる(2)、目につく、ご対面だ、目の前がぼやける、～目になる、目を止める	9	30	128
合計		174		112		45	55	384

第一に、三種類の日本語翻訳版において、see が「他動詞」、「自動詞」のどちらに翻訳されているかについて考察しよう。三種類の日本語翻訳本を合わせてみると、他動詞表現に

翻訳される用例（174 例）が、自動詞の用例（112 例）を上回っている。また、他動詞表現の場合は、「見る」の様態を表す多様な動詞が使用されている一方、自動詞表現のほうが「見える」「わかる」「会う」などの動詞に限定される傾向がある。なお、自動詞「見える」と他動詞「見る」の使用傾向を見ると、「見る」（三種類の訳本合わせて 75 例）より「見える」（三種類の訳本合わせて 96 例）のほうが多用されている。だが、中山訳においては、その使用傾向が逆になっている。そこからも「見る」と「見える」の使用傾向が、訳者によって、個人差があるという現象もみられる。

「慣用表現及びコロケーション」の用例には、身体語彙「目」を用いたものが圧倒的優勢を示している。また、「姿を消す」「目の前がぼやける」など、否定的形は取っていないが、「（うまく）見えない」という意味を表すコロケーションも下記のように存在している。

(9) a. he watched the airplane until he could no longer see it.

b. 老人が見つめているうちに、航空機はやがて姿を消してしまった。（中山訳）

(10) a. The old man felt faint and sick and he could not see well.

b. 老人は気が遠くなり、胸苦しくもなって、目の前がぼやけた。（小川訳）

最後に、「無対応」部分に関して、小川訳（30 例）は、福田訳（11 例）と中山訳（12 例）を大幅に超えている。こうした現象も、訳者によって翻訳スタイルが異なることを示すと言えるが、詳細な議論は、次節で検討することにする。

次に、中国語翻訳本について、対応する表現を「動詞」⁴、「慣用表現及びコロケーション」、「無対応」の三類に分け、それぞれについて分析する。

表 2 中国語翻訳版各翻訳における see の対応表現

訳本	動詞	合計 (1)	慣用表現及びコロケーション	合計 (2)	無対応	合計
呉	看见(65)、看(16)、看到(16)、 见(15)、看出(3)、发现(2)、观看、 找	119	看看(3)、见识见识、看 一眼、眼睛好使、弄清楚、 见闻	8	1	128
張	看见(93)、看(21)、看出(2)、看到 (2)、发现(2)、见	121	见闻、见识见识、看看、 眼光清楚	4	3	128
海	看见(76)、看(16)、看到(12)、看 出(6)、见(4)、知道、望见	116	看看(4)、看一看(4)、瞧 一瞧(3)	11	1	128

⁴ 本研究では“看清楚”などを動詞と見なさず、動補構造（つまり、フレーズ）と認定する。“眼睛好使”、“眼光清楚”は各一例あるのみであるが、主述構造と考えられる。（朱德熙 1982）

(a) When he could see, he saw the fish was on his back with his silver belly up.

(b) 等他的眼睛好使了，他看见那鱼仰天躺着，银色的肚皮朝上。（呉）

(c) 他眼光清楚的时候，他看见那鱼仰天躺着，银色的肚子朝上。（張）

表2を表1と比べれば、中国語では、seeの対応表現は日本語ほど豊富ではないことが分かる。表2からわかるように、使用数のトップ三位は“看见 kan-jian” “看 kan” “看到 kan-dao”である。対応する動詞も限られ、「慣用表現及びコロケーション」の数も少ない。また、身体語彙の使用も僅か3例（“看一眼”、“眼睛好使”、“眼光清楚”）のみで、日本語翻訳翻訳版とは比べものにならない。

最も注目すべき現象は、「無対応」部分が、各翻訳版で、それぞれ1例または3例しか見つからない点である。以下に、各翻訳版で、視覚動詞が対応していない全用例を挙げておく。

- (11) a. Then he looked behind him and saw that no land was visible.
 b. 随后他回头一望，陆地已没有一丝踪影了(影も形もなかった)。(呉)
 c. 他再回过头去看时，陆地已经从眼前消失了(目の前から消え失せてしまった)。(海)
- (12) a. How would you like to see me bring one in that dressed out over a thousand pounds?
 b. 我明天要是钓到一个一千多磅重的，你乐意不乐意？(張)
- (13) a. Once I could see quite well in the dark. Not in the absolute dark. But almost as a cat sees.
 b. 从前我在黑暗中也看得相当清楚。不是完全黑暗。但是差不多像一只猫一样。(張)
- (14) a. Then the line would not come in anymore and he held it until he saw the drops jumping from it in the sun.
 b. 然后那钓丝收不进来了，他拉着它，直拉得水珠从绳子里迸跳出来，在阳光中。(張)

2.2 認知レベルの対照

2.2.1 他者への自己投入⁵

前節の対照例では「話者」と実際の「観察者」は同一人物であるが、話者と観察者が異なっている場合は、観察者と視覚動詞が言語的に明示されないことは可能であろうか。

この疑問に答えるために、Langacker (1985) のステージ・モデルを紹介して考察したい。ステージ・モデルでは、「認知の客体」(O:視点対象)と「主体」(S:話者)がはっきり分かれている場合、いわば「最適観察構図:optimal viewing arrangement」の場合、知覚者は観客として舞台の外で、舞台上の事態を見る。こうした認知は、以下の図1に示すように、英語話者の認知スタンスのプロトタイプと言える。

⁵ 池上 (2005:27) の説明によると、「舞台の外に身を置いていた認知の主体が舞台の上であって自らの把握の対象としようとする事態の中に自分自身を投入し、そのまま舞台の上で自らを観察の原点として事態把握を行うという場合である。」

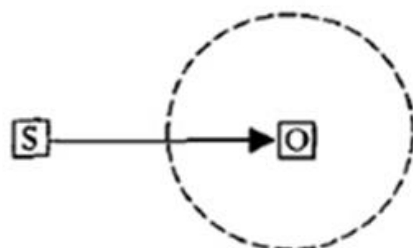


図1：最適観察構図（Langacker 1985:121）

その一方で、英語母語話者は＜主客合一＞的な事態把握をしないとは言えない。例えば、『老人と海』において、以下の例(15)のような例もある。

- (15) It is silly not to hope, *he* thought. Besides I believe it is a sin. Do not think about sin, *He* thought. There are enough problems now without sin. Also *I* have no understanding of it. *I* have no understanding of it and *I* am not sure that *I* believe in it. Perhaps it was a sin to kill the fish. *I* suppose it was even though *I* did it to keep me alive and feed many people.

(15)では、*he* と *I* が混在しており、作者のヘミングウェイは、舞台に上がり、「老人」と高度に＜主客合一＞的な状態に達し、常に老人の眼を通して物事を語っている。老人の心理状態に関する描写においても、「思っている」や「考える」等の心理動詞も使わず、「*he* (かれ)」「the old man (老人)」ではなく、直接、一人称を用いて老人の心理活動をそのまま述べている。

(15)のように、どの言語でも話者は、三人称に＜自己投入＞という認知操作が可能であり、池上(2005:28)も、「言語の話し手が事態把握に際してどの程度容易にそのような認知過程に身を任せるかという点に関しては、言語間において差があるように思われる」と述べている。日本語話者の場合は、＜主客合一＞的な事態把握を取りやすいため、＜自己投入＞の認知的営みもより容易に実行される。

一方、中国語の場合、池上（2012:16）や李（2016:7）でも述べられているように、中国語母語話者の認知スタンスは英語話者に近く、日本語ほど＜主客合一＞的な性質をもたない。

次節では、中国語の認知スタンスについて、英語・日本語との対照的視点から考察する。

2.2.2 観察者の非明示

英語では、主語が義務的につくが、日本語と中国語では主語は省略が可能である。ただし、日中語間では、必ずしも同じ傾向を呈しているわけではない。

以下、実例に基づき、観察者の非明示化が、日中翻訳において、どのような傾向が見られるのかについて検討してみよう。

まず、観察者が明示化されるか否かによって、三分類する。第一の分類は、観察者が完

全に明示化されていない場合、つまり単文または複文のどこにも観察者が言語化されていない場合である。

- (16) a. It was getting late in the afternoon and he saw nothing but the sea and the sky.
b. 時刻はもう夕暮に近い。海と空のほかにはなにも見えなかった。(福田)
c. 这时天色渐渐地向晚。除了海和天,什么也看不出来。(海)

第二の分類は、観察者が直接的に明示化されている場合、つまり単文または複文の視覚動詞の所在部分に観察者が言語化されている場合である。

- (17) a. Then he dove suddenly and the old man saw flying fish spurt out of the water and sail desperately over the surface.
b. そのとき、老人は、海のなかからさっと飛魚が跳ねあがり、死にものぐるいで、水面すれすれに走りまわるのを認めた。(福田)
c. 然后他突然下降，老人看见飞鱼从水中喷射出来，绝望地在水面上掠过。(張)

第三の分類は、観察者が間接的に明示化されている場合、つまり複文では視覚動詞の所在部分に観察者が明示されていないが、文のほかの部分で言語化されている場合である。

- (18) a. The old man felt faint and sick and he could not see well.
b. 老人は目眩がし吐き気に襲われ、目はよく見えなかった。(中山)
c. 老人感到头晕，恶心，看不大清楚东西。(呉)

(16a) の観察者である he は日中両文に言語化されていない。(17b) と (17c) では「老人」が単文の主語の位置に立ち、紛れもなく視覚動詞の主体と考えられる。(18b) と例 (18c) は複文であり、老人の感覚を描写している。観察者である「老人」は複文の前節に現われ、視覚動詞は複文の後節に置かれている。すなわち、観察者が明示化されているが、視覚動詞と複文の異なる位置に出現する。

各翻訳版における観察者の明示化を対比すると、以下の表 3 のように表される。

表 3：日本語・中国語翻訳版における観察者の明示/非明示の用例数

言語	翻訳版	非明示	合計 (1)	直接の明示	合計 (2)	間接の明示	合計 (3)	合計 ⁶ (4)
日本語	福田	69	233	49	114	10	37	151
	中山	60		50		18		
	小川	104		15		9		
中国語	呉	5	18	90	293	33	73	366
	張	5		105		18		
	海	8		98		22		

翻訳者によって、個人差はあるものの、三種類の日本語翻訳版と三種類の中国語翻訳版における観察者の明示（直接の明示/間接の明示）・非明示を対比させると、以下の図 2 のように表される。

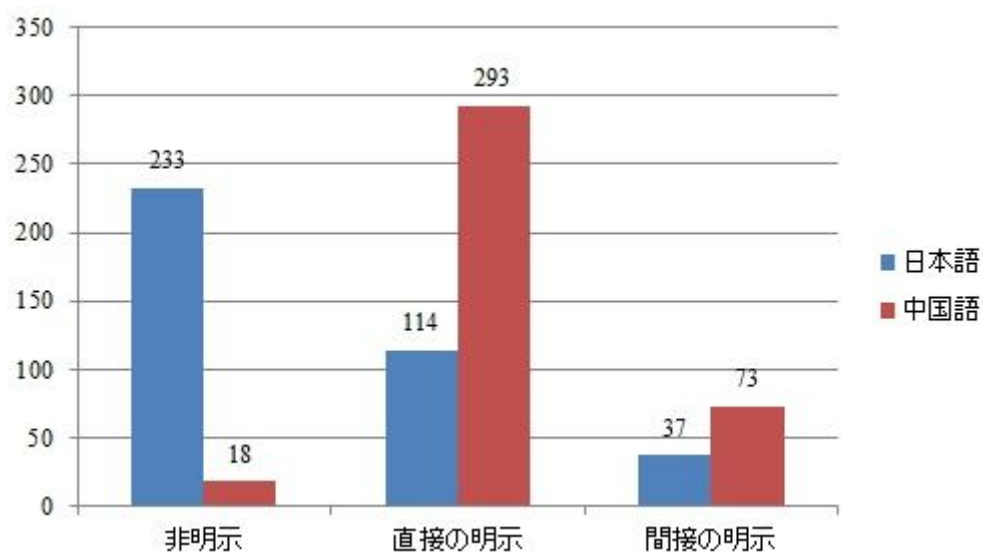


図 2 日中翻訳版における観察者の「非明示」「直接の明示」「間接の明示」例文数

図 2 から、次の三つの現象が読み取れる。

第一に、全体の傾向として、日本語翻訳版では観察者の非明示が採用されやすいのに対して、中国語翻訳版では観察者の明示化される翻訳が多い。具体的な数値で説明すると、日本語三翻訳版においては、観察者の非明示化は 233 例であり、56%に達しているが、中国語三翻訳版においては、逆に観察者の明示化（即ち、「直接の明示」の 293 例+「間接の明示」の 73 例）が 366 例を数え、9 割強である。

第二に、日中翻訳版における直接の明示と間接の明示の数値にも、かなりの違いが見ら

⁶ 合計(4)は三種類翻訳における「明示」の総用例数である(合計(4)=合計(2)+合計(3))。

れる。日本語の場合では、「直接の明示」と「間接の明示」はそれぞれ 114 例と 37 例であり、全体の 35%と 9%を占めている。

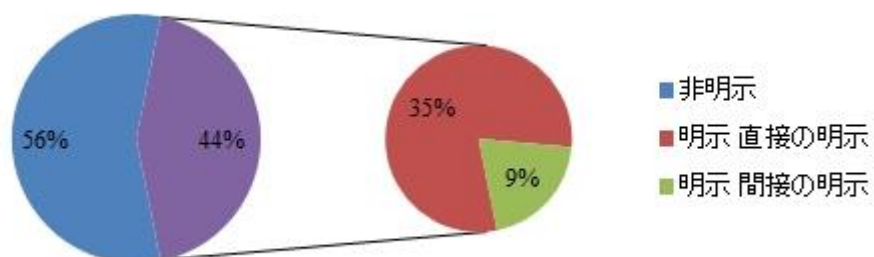


図 3：日本語翻訳版における観察者の「非明示」と「(直接/間接の) 明示」の割合

一方、中国語の場合では、「間接の明示」の 73 例に対して「直接の明示」は全体の七割を超え、293 例となっている。

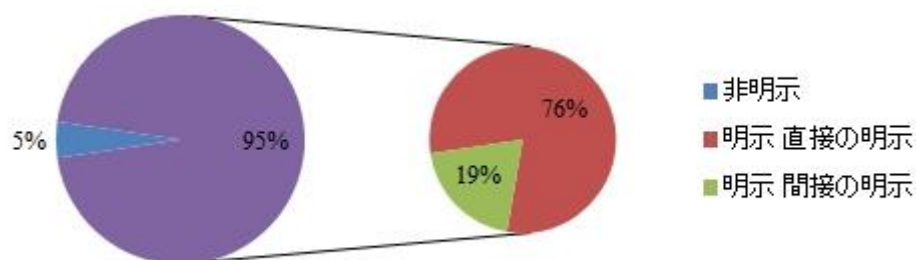


図 4：中国語翻訳版における観察者の「非明示」と「(直接/間接の) 明示」の割合

さらに、日本語翻訳版においては訳者の個人差が明らかに見られる。小川訳では「非明示」は 104 例となっており、全体の 8 割を超えている。それに対して、福田訳と中山訳では「非明示」の比例はほぼ同じである。

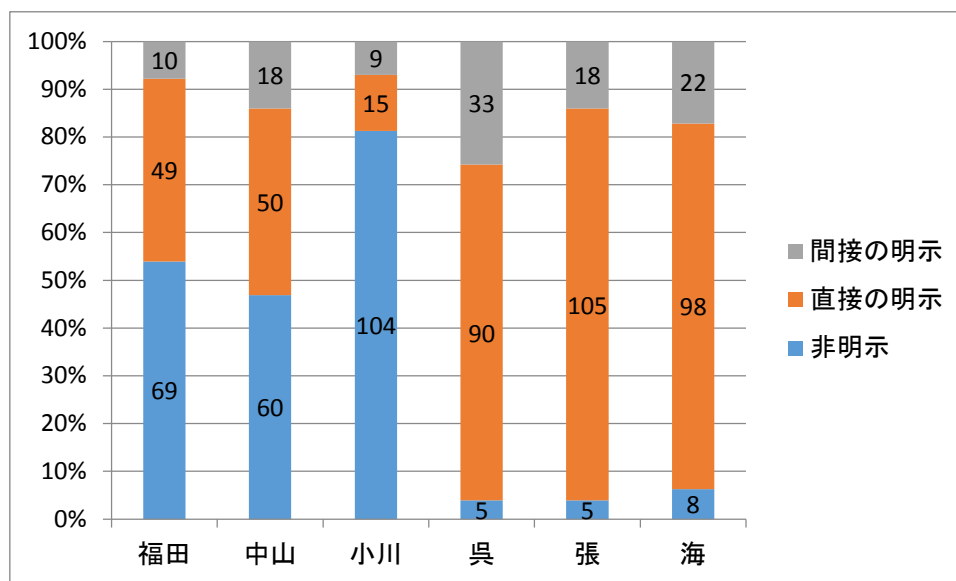


図 5：日中各翻訳版における観察者の「非明示」と「(直接/間接の) 明示」の例文数

一方で、中国語の各翻訳版には小川訳のような例外が見つからない。中国語翻訳版の三種類の翻訳においては、観察者の明示・非明示にそれほど大きな差はない。こうした対比も中国語翻訳と比べると、日本語翻訳のほうは観察者の非明示化が無標であることが読み取れる。

2.2.3 視覚動詞のゼロ化

次に、日本語・中国語の各翻訳版において、英語原文における視覚動詞 *see* はどんな場合に非明示化されるかについて考察する。まず、各翻訳版における視覚動詞のゼロ化の分布図 6 をみてみよう。

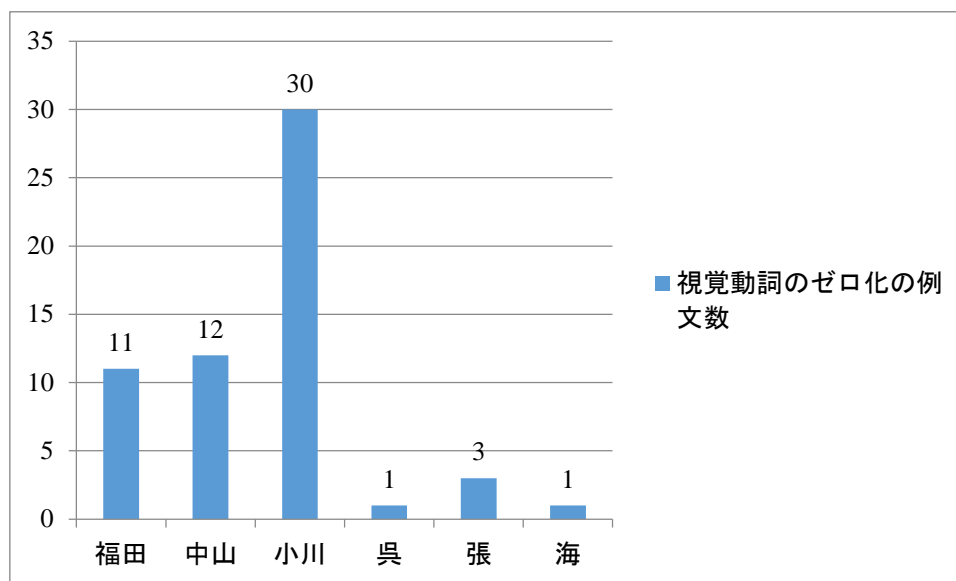


図 6：日中翻訳版における「視覚動詞のゼロ化」の例文数

視覚動詞のゼロ化において、日本語翻訳版では、小川訳では 30 例と多いのに対して、福田訳・中山訳ではそれぞれ 11 例、12 例と、個人差があるが、中国語の各翻訳版では視覚動詞のゼロ化がほぼ同じで、非常に少ない。ところが、日本語の各翻訳版ではそれぞれ 10 例以上を数え、特に小川訳では全体の 5 割強を占めている。これは観察者の非明示における各翻訳版の傾向とほぼ対応している。

なぜ日中翻訳版に視覚動詞のゼロ化が生じるのだろうか。ある言語を他の言語で表現する際、文の特定の成分を省略する場合、省略には条件があり、以下のいずれかの条件が満たされれば、その成分を省略可能である。

I. その成分の意味がコンテキストの中で重要でない場合

例えば、次の(19)では something の修飾節である that he can't see は重要な情報ではないので、日本語翻訳版では省略されている。

- (19) a. But I will see something that he can't see such as a bird working and get him to come out after dolphin.
 b. 僕が遠くを見る係で、鳥の動きを見たりして、それでセイラを追いかける。(小川)

II. その成分の意味が既にコンテキストに含まれている場合

- (20) a. Once I could see quite well in the dark. Not in the absolute dark. But almost as a cat sees.
 b. かつては俺も、暗がりによく見えたものだ。真っ暗闇では無理だが。しかし、ほぼネコ程度には。(中山)
 c. 从前我在黑暗中也看得相当清楚。不是完全黑暗。但是差不多像一只猫一样。(張)

III. その成分の意味が訳文で翻訳されなくても意味がわかる場合

- (21) a. He watched his lines to see them go straight down out of sight into the water and he was happy to see so much plankton because it meant fish.
b. 釣綱はどれも真直ぐ伸びて水中の奥に消えていたし、魚の生息に直結する夥しいプランクトンを目撃し老人の機嫌は上々だった。(中山)

以上の三例では、see が翻訳されていないけれども、前の文脈から推測可能で解釈できるが、以下に挙げる(22)の各例では、日本語翻訳版においては、see が翻訳されていないのに対して、中国語翻訳版においては、see が<看见>として翻訳されている。

- (22) a. Now the old man looked up and saw that the bird was circling again.
b. ふと老人は空を仰ぎ見た。ふたたび鳥が輪を描いて舞っている。(福田)
c. ひょいと空を見あげると、グンカンドリがまた輪を描いていた。(中山)
d. 老人が目を上げると、また軍艦鳥が旋回していた。(小川)
e. 老人此刻抬眼望去，看见那只鸟儿又在盘旋了。(呉)
f. 现在那老人抬起头来，看见那鸟又在那里盘旋着了。(張)
g. 这时老头儿抬起头来，看见那只老鹰又在打着转儿了。(海)

英語の原文では、主人公が姿勢を変えて、新たな光景が目に入る場合、つまりある動作と場面の転換を描写する際、日本語翻訳版では視覚動詞のゼロ化がしばしば現れるが、中国語翻訳版ではそのまま視覚動詞が保持されている。例えば、上述の日本語例文の後半に「見える」「見る」などの視覚動詞を追加すると、冗長でかえって不自然になる。一方、中国語例文では、「看见」を付けなければ、やや安定感が欠け、不自然である。

さらに、日本語で視覚動詞が明示されない例をみよう。以下に挙げる(23)(24)(25)(26)の例では、英文で明示されている観察者と視覚動詞が非明示化されている。

- (23) a. The old man could see that he was very tired.
b. へばっているのだろう。(中山)
- (24) a. He had seen many that weighed more than a thousand pounds and he had caught two of that size but never alone.
b. 一千ポンドを超える大物もめずらしくはなく、それくらいのを二度つかまえたことがあるが、二度とも一人ではなかった。(小川)
- (25) a. The bird went higher in the air and circled again, his wings motionless. Then he dove suddenly and the old man saw flying fish spurt out of the water and sail desperately over the surface.

- b. 鳥が上昇して、また旋回した。翼は動かしていない。すると鳥は急降下し、海面からはトビウオの群れが湧き上がって、猛烈な勢いで水上を飛んでいった。(小川)

(26) a. The clouds were building up now for the trade wind and he looked ahead and saw a flight of wild ducks etching themselves against the sky over the water, then blurring, then etching again and he knew no man was ever alone on the sea.

- b. 貿易風にともなう雲がむくむく立ち昇りはじめた。ふと、頭上を見ると野鴨の一群が、空にくっきりその形を刻みこんだような影を見せて水の上を渡っていく。一瞬影が薄くなる。が、つぎの瞬間にはふたたびくっきりした形をとる。(福田)
- c. 雲は貿易風に煽られていまや高く聳えたち、行く手に目を走らせると、カモの群れが海面の上空に自らの姿を鮮やかに描き、いったん霞んではまた姿をくっきり描きだしていた。(中山)
- d. 貿易風から生じる雲がむくむくと立ち上がる。はるか前方にカモの一群が飛んで、海面の上空に鳥影を刻み、ぼやけたと思うとまた刻む。(小川)

池上(2012:13)では、事態把握のスタンスの違いを証明するために、(27)のような例文が挙げられている。

- (27) a. 「外へ出たら、月が明るく輝いていた。」
b. “Going out, I saw the moon shining brightly.”
c. “?? Going out, the moon was shining brightly.”

確かに例(27a)の視覚動詞ゼロ化の文は、日本語では文法的であり、英語のように視覚動詞を付けると、かえって不自然に聞こえる⁷。

仁田(1991)は、(27a)のような文を、現象描写文と呼んでいる。仁田(1991:36)によれば、現象描写文とは、「話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられたある時空の元に存在する現象を、現象の存在への確認を有しているものの、主観の加工を加えないで言語表現化して、述べたものである。また、現象描写文は、新たに現象を言語表現の場に導入するといった文である」。仁田(1991)では、その典型的な例文として、「向こうからお嫁さんがやってくる」と「よく見ると、雨が降っている」等の例文が挙げられている。特に、後者の場合、従属節の「～と」表現以外、「～ば」、「～たら」等も常用され、元の場面から新しい場面に転換するマーカーと認識され、常に発見のニュアンスが出てくる。

では、中国語の場合は、例(27)はどのように表現されるのだろうか。

- (28) a. 走到外面，只见月光皎洁。(外へ出たら、ただ、月が明るく輝いているのが見えた。)
b. ??走到外面，月光皎洁。(外へ出たら、月が明るく輝いていた。)

⁷ ただし、「外へ出たら、月が明るく輝いているのが見えた」ならば、不自然ではない。

中国語母語話者の直観では、観察者と視覚動詞のいずれも表されない (28b) は不自然であり、(28a)のように<只見 zhi-jian> (ただ見えた) を付け加えると、より自然である。『中日コーパス』からも、次のような例文が見られる。

(29) a. 驚いて振り向くと、長身のアルさんが、ぬうっとした風貌でレインコートを抱えて立っていた。

b. 杏子愕然回头，只见身材瘦长的乙醇怀抱雨衣，呆愣愣地站定不动。

(中日対訳コーパス 『あした来る人』)

(30) a. 授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。

b. 由于讲课的需要，第一堂课，俺下来得稍微晚了一点。回到休息室来一看，其他老师都坐在桌子前谈着话。

(中日対訳コーパス 『坊ちゃん』)

(31) a. そしてひとたび門をくぐれば、神秘的な門はその門内に蒼穹の全部と、雲の悉くを収めていることがわかるのであった。

b. 走进大门后你会惊讶地发现，原来这神秘的大门已将无边的苍穹、天下的云雾也都收了进去。

(中日対訳コーパス 『金閣寺』)

以上の例文では、いずれも条件節であり、前節の「振り向く」「帰る」「くぐる」などの動作が実現されてから、後節の新たな場面が展開することを表している。日本語の場合、観察者と視覚動詞が非明示化されているが、中国語の場合、観察者は省略されることはあっても、視覚動詞は省略ができない。

『老人と海』の各翻訳版における観察者と視覚動詞のゼロ化から見ると、日本語は中国語よりも、<主客合一>的な事態把握とその表現が卓越しているといえる。一方、中国語においては、視覚動詞が省略できない場合も多く、日本語ほど<主客合一>的な事態把握と表現が可能ではない。

3. 結び

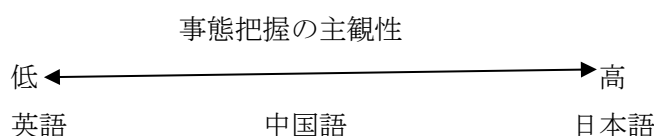
本稿では、『老人と海』の英語・日本語・中国語パラレルコーパスに基づき、視覚表現 see を含む表現がどのように日本語及び中国語に訳出されるかをめぐり、実証的な考察を行った。

観察者の明示・非明示については、英語では統語的に観察者の主語を省略不可能であるが、日本語・中国語では、共に統語的に主語の省略が可能である。しかしながら、中国語は、日本語ほど観察者の省略が起こらない。これは、彭(2016:41)も述べているように、中国語が、一人称、二人称、三人称に関わりなく、動作主或いは知覚の経験者を主語にし、主語の視点から事象を叙述していく傾向があることと、関連していると思われる。

視覚動詞のゼロ化現象においては、日本語は、中国語をはるかに上回っている。その要因として考えられるのは、日本語の条件節「～と、たら」という言語標識が、次の事象展開を明示できる一方で、中国語では、条件節を表す形式がなく、また接続詞も日本語ほど豊富ではないため、視覚動詞を後節の冒頭に用いることによって、事象展開を表示する必要があることと関連すると考えられる。

視覚表現における事態把握の「主観性」という観点からみると、英語・日本語・中国語は以下のような類型をもつことが示唆される。

(32) 視覚表現における事態把握の「主観性」



中国語と日本語の事態把握の主観性の検証については、視覚表現における動詞の自他という現象についても、検討が必要であるが、それは今後の研究課題としたい。

小説及び翻訳資料

The Old Man and the Sea, (1952) Ernest Hemingway.

日本語版：1 福田恆存訳(1966) 新潮社

2 中山善行訳(2013) 柏艚舎

3 小川高義訳(2014) 光文社

中国語版：1 海観 訳(2000) 人民日報出版社

2 呉勞 訳(2006) 上海訳文出版社

3 張愛玲 訳(2012) 北京十月文芸出版社.

使用コーパス：

『日中対訳コーパス』(2003) CD.北京日本学研究センター.

使用辞書：

『英語基本動詞辞典』小西友七編 (1980) 研究社

参考文献

Langacker, Ronald W. (1985) “Observations and Speculations on Subjectivity” John Haiman (ed.)

Iconicity in Syntax John Benjamins pp.109-150

池上嘉彦 (2005) 「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標(2)」『認知言語学論

考』 pp.1-60.ひつじ書房

池上嘉彦 (2012) 「＜言語の構造＞から＜話者の認知スタンス＞へ—＜主客合一＞的な事態把握と＜主客対立＞的な事態把握—」『国語と国文学』 11:pp.3-17.明治書院

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

深田智・仲本康一郎 (2008)『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ』 研究社

李奇楠(2016)「中国語・日本語の構文から見る主観性」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性：認知とポライトネスの接点』 pp.1-17.くろしお出版

彭広陸(2016)「日中両語のヴォイスに見られる視点のあり方」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性：認知とポライトネスの接点』 pp.35-51.くろしお出版

朱德熙(1982)『語法講義』 商務印書館